

12. 児童自立支援施設入所児童の入所の背景 および入所後・退所後の状態像の追跡的調査

氏名	所属	現所属
○ 若杉 夏樹	元横浜市向陽学園園長	地域療育センターあおば
桑原 和樹	横浜市向陽学園やまゆり寮寮長	
桂木 久	横浜市向陽学園ばら寮寮長	
熊澤 健	横浜市向陽学園ふじ寮寮長	
伊藤 尚弘	横浜市向陽学園さくら寮寮長	
池上 利治	横浜市向陽学園 F S W	
大原 天青	元横浜市向陽学園嘱託心理士	会津大学短期大学部講師

【 問 題 】

児童福祉法 44 条によれば児童自立支援施設は、「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導などを要する児童を入所させ、又は保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設」と定義されている。その歴史は、感化院（1900 年～1933）にはじまり、少年教護院（1933～1947）、教護院（1947～1997）と名称を変え現在に至っており、100 年以上ある。しかしながら、これまで児童自立支援施設に入所する子どもの背景や入所後の状態については十分な体系だった蓄積がなされていない。

厚生労働省（2006）による『「児童自立支援施設のあり方に関する研究会」報告書のとりまとめについて』では、(1)施設における自立支援機能の充実・強化、(2)施設の運営体制の充実・強化、(3)関係機関等との連携、(4)児童自立支援施設の将来構想について、当面早急に取り組むべき課題や方向性が整理された。そこでは、(1)自立支援機能の充実・強化のひとつとして、①支援技術・方法の課題が指摘された。すなわち、A アセスメント及び自立支援計画策定のあり方について、関係者による協働型の計画策定のためのシステムづくりの必要性、B 被虐待経験や発達障害等を有する特別なケアを要する子どもの支援・援助のあり方とその効果的な改善・回復方法などの検討、C 自らの行った非行行為と向き合う取組を通じた自立支援のあり方および、少年院における取組の成果の活用や児童自立支援施設のこれまでの実践の検証・評価など、充実に向けた検討・研究が必要であるとされた。

上述の指摘は、問題行動を理由に入所した子どもがどのように変化し退園を迎えるのかといった実証的なデータが不足しており、入所児童のニーズからみる「措置」の妥当性や支援効果、さらに社会から求められるアカウンタビリティに答えることができないという問題を抱えていた。

そこで、本研究では、まず、過去の児童記録から必要事項を抽出し、どのような子どもが入所していたのかを客観的に明らかにすることを試みた。

【 目的 】

本研究では、上述の課題を受けて、教護院および児童自立支援施設に入所した子どもの入所理由、非行の概要、家族・養育者の特徴などを遡及的に明らかにすることを目的とした。その際、時代的な変遷に注目し、1990年代と2010年代の各10年間のデータを比較することにした。

【 方法 】

本研究では、1990年～2010年に児童自立支援施設に入所した子どもの「児童記録」と「児童日誌」を分析の対象とした。入所した子どもには、児童相談所の児童福祉司によって1人1冊ずつ児童記録が作成される。また、児童日誌は、児童自立支援施設に入所期間中の子どもの成長の記録が作成されている。これらの既存データから、次のような項目を抽出した。①入所時の年齢、②入所期間、③母親出産時の年齢、④父親の出生時の年齢、⑤同居兄弟数、⑥別居兄弟数、⑦実母の離婚回数、⑧実父の離婚回数、⑨全IQ（言語性（VIQ）・動作性（PIQ））、⑩初発年齢、⑪非行の種類等250項目を設定した。

データの入力に当たっては、各変数の入力のフォーマットを作成し、入力実施者間で入力内容に齟齬がないよう同一ケースを複数入力し一致率が100%になるまで項目の基準を明確化した。そのうえで、複数体制で入力作業を行い、判断に迷った場合には合議し、判断した。

なお、本研究で対象とするケースは、過去の遡及的なデータであるため、各変数で人数にばらつきが見られたが、本報告では貴重なデータを生かすために人数を統一しなかった。

【 倫理的配慮 】

本研究の実施に当たって、実施機関の上位組織において倫理的な配慮について検討が行われ、個人情報特定されない形で実施・発表することの承諾を得た。

【 結果 】

（1）入所する子どもの基本属性について

本研究で対象となった子どもの基本属性を年代ごとに報告する（表1）。紙面の関係上、重要と思われるポイントのみ示す。

- 離婚回数について：1990年代、実母0.85回（SD=0.74）、実父0.81回（SD=0.74）、2000年代、実母1.26回（SD=0.92）、実父0.95回（SD=0.64）であった。
- 初発年齢と入所年：1990年代、平均年齢14.03歳（SD=1.51）、初発年齢10.23歳（SD=2.64）であった。2000年代の平均年齢14.30歳（SD=1.55）、初発年齢9.90歳（SD=2.7）であった。
- 入所期間：1990年代は441日、2000年代は、518日であった。

表1. 基本属性

	1990年代					2000年代				
	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
入所時の年齢	144	9.27	17.63	14.03	1.51	70	9.76	17.30	14.17	1.55
入所期間	140	1	2825	530.26	441.05	65	10	1510	518.37	387.76
母親出産時の年齢	126	15.49	44.28	26.83	5.94	65	16.43	41.68	26.94	6.17
父親の出生時の年齢	120	19.27	66.75	31.99	8.59	49	14.80	49.42	30.96	7.28
同居兄弟数	144	0	8	1.50	1.53	70	0	6	1.31	1.36
別居兄弟	143	0	4	.51	.86	69	0	3	.59	.91
実母の離婚回数	142	0	3	.85	.74	68	0	4	1.26	.92
実父の離婚回数	140	0	4	.81	.74	62	0	3	.95	.64
全IQ	133	55	116	85.60	12.31	63	52	121	86.25	15.11
言語性(VIQ)	67	55	114	84.70	11.88	34	65	106	85.44	11.69
動作性(PIQ)	66	57	119	91.85	13.74	34	61	131	89.21	14.85
初発年齢	138	3	15	10.23	2.64	60	3	15	9.90	2.70

(2) 非行の種類

入所前の非行の種類について単純集計を行った。年代ごとに非行の割合が高い10種類を塗りつぶして示した(表2)。重要と思われるポイントを以下に示す。

- 2つの年代で増加した非行：家庭内暴力(1990年代：2000年代=14.8%：25.7%)、学校内での暴力行為(16.9%：32.9%)、学校外暴行傷害(20.9%：32.9%)、性的問題行動(14.1%：25.7%)、同性間の性的問題(4.2%：11.4%)。
- 2つの年代で減少した非行：家出外泊(63.6%：45.7%)、深夜徘徊(61.7%：42.9%)、恐喝(22.5%：8.6%)、薬物非行(19.0%：1.4%)、暴走行為(21.1%：7.1%)であった。
- 2つの年代で共通して高い割合であった非行：怠学(79.6%：71.0%)、家出外泊(63.6%：45.7%)、深夜徘徊(61.7%：42.9%)、自転車・オートバイク盗以外の窃盗(52.1%：35.7%)。

【 考 察 】

本研究では、1990年代と2010年代の各10年間に教護院および児童自立支援施設に入所した子どもの入所理由、非行の概要、家族・養育者の特徴などを遡及的に明らかにすることを目的とした。その結果次のようなことが明らかになった。

- (1) 基本属性について：2つの年代で大きな違いは見られなかった。つまり、1900年から2000年までの間では、入所年齢、出生時の家族の年齢、兄弟数、実母の離婚回数にお

いてほぼ変化が見られていないことが明らかになった。特に、両親の離婚回数等は子どもの逆境的な体験として、その後の人生に大きな影響を及ぼすことが明らかにされている。本研究の結果、1990年代と2010年代でその割合の大きな違いが見られなかったことは、児童自立支援施設に入所する子どもに共通して、両親の離婚や片親家庭で育ったといういわば片親との分離の体験があることが明らかとなった。これは、心理的側面—特に人への信頼感などに大きな影響をあえていることが予想される。

つまり、児童自立支援施設に入所する子どもの年齢層や家族背景について「逆境的な体験」を有するという一貫した対象が入所していることが明らかとなった。

表2. 非行の種類

	1990年代				2000年代			
	なし		あり		なし		あり	
	N	%	N	%	N	%	N	%
ひったくり	135	95.1	7	4.9	68	97.1	2	2.9
自転車オートバイ盗	74	51.7	69	48.3	44	62.9	26	37.1
それ以外の窃盗	68	47.9	74	52.1	45	64.3	25	35.7
家庭内暴行傷害	121	85.2	21	14.8	52	74.3	18	25.7
学校内での暴力行為	118	83.1	24	16.9	47	67.1	23	32.9
その他暴行傷害	113	79.6	29	20.4	47	67.1	23	32.9
詐欺	136	96.5	5	3.5	69	98.6	1	1.4
恐喝	110	77.5	32	22.5	64	91.4	6	8.6
家出外泊	51	36.4	89	63.6	38	54.3	32	45.7
深夜徘徊	54	38.3	87	61.7	40	57.1	30	42.9
不良交友	70	49.0	73	51.0	48	68.6	22	31.4
放火	128	90.8	13	9.2	66	94.3	4	5.7
火遊び	124	87.3	18	12.7	60	87.0	9	13.0
薬物非行	115	81.0	27	19.0	69	98.6	1	1.4
喫煙	82	57.7	60	42.3	47	67.1	23	32.9
飲酒	130	91.5	12	8.5	66	94.3	4	5.7
幼い異性への強制わいせつ	138	97.9	3	2.1	66	94.3	4	5.7
同年齢以上への強制わいせつ	137	96.5	5	3.5	67	95.7	3	4.3
同性間の性的問題	136	95.8	6	4.2	62	88.6	8	11.4
性的問題行動	122	85.9	20	14.1	52	74.3	18	25.7
家金持ち出し	90	63.4	52	36.6	46	65.7	24	34.3
暴走行為	112	78.9	30	21.1	65	92.9	5	7.1
器物損壊	106	74.6	36	25.4	56	80.0	14	20.0
いじめる	120	84.5	22	15.5	60	85.7	10	14.3
いじめられる	114	80.3	28	19.7	59	84.3	11	15.7
怠学	29	20.4	113	79.6	20	29.0	49	71.0

(2) 初発非行から入所までの期間：1990年代は3.8年であったが、2000年代は4.2年と初発非行から入所までの期間が長期化していた。2000年代は、児童相談所での子ども虐待対応件数が年々増加しており、虐待対応に時間を割かれ、非行的行動を持つ子どもへの対応が遅れていた可能性がある。

- (3) 性非行の増加：1990年代と2000年代で性非行に増加が見られていた。この結果は、近年の性的非行の増加と対応するものである。
- (4) 各時代で共通した非行：非行は時代を映し出す鏡であると言われる。しかし、年代ごとに共通した非行も明らかになった。つまり、両年代に共通して多かったのは怠学や家出外泊、深夜徘徊は時代の変化にかかわらず、児童自立支援施設に入所する子どもに共通した特徴であると考えられた（その要因に家庭基盤の脆弱性が関与している）。
- (5) 増加した非行：1990年代では器物破損や恐喝が上位10種類に入っていたが、2000年代になると学校内での暴力やその他の暴行傷害による入所が増加していた。これは、近年増加する家庭内暴力や校内暴力件数（犯罪白書、2012）の結果と重なっていた。今後こうした種類の非行を行った子どもの割合が増える可能性がある。
- (6) 減少した非行：1990年代と2000年代で減少した非行に、恐喝、薬物非行、暴走行などがあることが明らかとなった。2000年代以降これらの割合が低下しており、これらは時代背景を反映した特徴的な非行であると考えられた。

本研究報告では、紙面の関係上、以下のような重要なデータを提示することができなかった。今後、これらの結果を分析・公開し、児童自立支援施設に入所する子どもの支援に活かされることが期待される。

- (1) 虐待の有無およびその種類に関する時代的な変遷について。
- (2) 入所前－入所当初－退所時－退所後といった一連の状態像の変化
- (3) 入所中の支援状況に関する資料。
- (3) 教護院と児童自立支援施設入所児童のニーズの変化

【 参考文献 】

厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課（2006）「児童自立支援施設のあり方に関する研究会」報告書のとりまとめについて」平成18年3月6日

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/02/s0228-2.html>

厚生労働省（2011）「平成23年版 犯罪白書」<http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/58/nfm/mokuji.html>

【 助成金の使途 】

使途	金額
データ入力作業代（3名のアルバイト要員）	¥283,900.-
参考書籍代	¥13,230.-
データ保存用USB代	¥2,003.-
振り込み手数料他	¥892.-
合計額	¥300,025.-